

令和4年度第2回愛知県環境教育等推進協議会会議録

1 日時

令和5年3月20日（月）午後3時から午後4時40分まで

2 場所

愛知県三の丸庁舎8階 大会議室

3 出席者

委員12名（うちオンライン出席1名）

4 傍聴人

なし

5 会議の概要

（1）開会

（2）議事

- ア 各主体の取組事例の調査について
事務局から、資料1について説明。
- イ 中間評価のための評価軸について
事務局から、資料2について説明。
- ウ その他

事務局から、第3回 Green Blue Education Forum コンクール 2022 において、愛知県立佐屋高等学校が環境大臣賞を受賞したことを紹介。

大鹿会長代理から、愛知教育大学のSDGs教材に関するクラウドファンディングについて紹介。

【質疑応答・要旨】

- ア 各主体の取組事例の調査について
(新海委員)

本計画の中間評価のための調査をするのであれば、どのような評価軸で評価するのかを決めておかないと調査対象が決まらないのではないかと。事務局がなぜ、この事例を選んだのかを知りたい。選定理由を読んだが、事務局の観点で選定されているように思う。この計画に基づいての選定がされているのだろうか。

本計画の中間評価のための調査であれば、行動計画の五つの力を育むために、どのような取組がされていたのかが明らかになる事例を調査する必要がある

のではないか。

事務局が選んだ事例がどの程度まで本計画の目標の達成に近づいているのかを把握し、その結果を中間評価のための資料として使うのであれば理解はできる。

五つの力を育むという指標軸に基づいてここに記載されている事例がどの程度目標を達成しているのかが示されれば判断ができるが、照らし合わせる評価軸がないためどのように選定してよいのかわからない。完璧な事例はないように思うので、この中から選ぶとしても、この計画に基づいての先進事例である点を示してほしい。

(千頭会長)

県内全ての事例について、五つの力がどうついたかを網羅的に調査するのは無理である。良い事例を選んで、具体的にヒアリングしたり、評価をする時に、五つの力に基づいて評価をしようという趣旨であると思う。

(新海委員)

それぞれの事例の五つの力を育てている状況を知るために取材をするのはわかるが、選定理由を明確にする必要があるのではないか。各事例の五つの力の育みにおいて良い部分を示していただきたい。資料に選定理由が書いてあるが、計画の指標と紐づくように書かれていないため選定理由としては良くないのではないか。

(大鹿会長代理)

最終的に中間評価に使うのはいいが、中間評価はどうあるべきか。良い事例を調査すれば、当然評価も良くなるが、その団体だからこそできるものであれば、他の団体はやれない。良い事例は確かに大事だが、アンケートに少ししか書いていない団体を調査し、県内の平均的なレベルが逆にわかったほうが、各団体の活動もうワンステップ上げるように促す方向に使えばいいと思う。

各主体から1団体を選ぶのであれば、良い団体を選ばざるを得ないが、平均的な取組をしている団体を取り上げ、大体このような感じでやっていて、ここまではできているが、ここは足りないなので、もう少し頑張ってもらいたいということと言えると思う。

ヒアリングは質的な評価になるが、アンケートに回答してもらった団体のレベルについて、大ざっぱでいいので、量的な評価があってもいいと思う。

(事務局)

平均的なレベルといっても、アンケートは自由記述であり、しっかり記載しているところもあれば、ウェブアドレスの記載のみのところもあり、この情報だけでは、どこがいいのか正直わからないのが実情である。

アンケートの回答で、五つの力の何にあてはまるのか、わかるものもあるかと思うが、五つの力のうちどの力を主に育み、付随的に育む力はどれかなどヒアリングしないとわからない。事務局が候補として提示したのは、目立つ取組であり、実際に調査したいと感じるものである。

(新海委員)

事務局が示した調査候補の共通点は、連携だと思われる。連携を重要な評価指標と考え、多様な主体との連携の仕方についてヒアリングし把握してはどうか。連携をする中で参加者がどのような力を育むことができたかを調査を通して把握すればよいのではないか。選定の理由は、面白い連携、協働をしているプログラムとし、調査事例を選ぶことを提案したい。

(千頭会長)

資料では選定理由と書いてあるが、ヒアリングのための理由であって、団体の活動をこの計画に基づいて評価する時の理由ではない。

(大鹿会長代理)

ヒアリング対象の選定に際しては、地域性やテーマのバランスを考慮してほしい。

(千頭会長)

五つの力は、主催する団体の力とは限らず、参加者がどういう力をつけたかであって、アンケートでは全然わからない。個々の事例で、参加者からのフィードバックの結果を調査して、初めてこの五つの力がついたかがわかる。

新海委員の発言のとおり、選ばれたのは、団体単独でやっているというよりは、活動の広がりがあり、連携・協働しているような団体が候補1として挙がっているので、その成果を五つの力と関連付けて、詳しく調査ができればいいと思う。

(藤岡委員)

この後選定した個々の事業者や学校等の方に対するヒアリングは、既に設問等を考えているのか、それも含め、今後検討するのか。雛形があって、調査をするということか。

(事務局)

ステップアップ・ワークシート（以下「ワークシート」）という評価シートを、県の代表する5事業で、既に令和2年度から先行して作っており、ヒアリングによりこのワークシートを完成して評価するものである。

事業のねらい、事業の実施の際の工夫、参加者の反応、そこでどういった力

が育まれ、こういった活動により効果があったかなどと併せ、事業の成果、参加者の反応なども聞くことを考えている。

このワークシートは、2019年3月に作成した「学びを行動につなぐサポートブック」において、各主体の方が環境活動や環境学習に取り組む際に押さえるべきよいポイントや取組の進め方を支援するために作成したものを元としている。

(藤岡委員)

このワークシートを作るためにヒアリングして、その中で五つの力のどこが足りない、もしくはどこが優れているということがここであぶり出される、という理解でよいか。

(事務局)

それを目指して進めていきたい。

(新海委員)

取組の中で弱い部分があれば今後どうしていくかなど、団体の方の気づきにもなると思う。完璧な事例を選ぶ必要はない。

学校と家庭と社会が、五つの力を育むためにタッグを組んで取り組んでいきたいと思いますというのがこの計画の魅力であり、みんなで底上げして、愛知県民に本計画にある五つの力が育まれる状態をつくるのが本計画のゴールだと思う。

中間評価は、今の段階の状況を把握し、残り6、7年かけてここまで進めようと検討するためのものになったらいいと思う。

イ 中間評価のための評価軸について

(伊藤委員)

調査先のテーマや地域を分散したほうがいいと思う。ヒアリング候補はほとんど三河地域である。アンケートの集計データを見ると、積極的に活動している地域、市町の回答が非常に多いと思う。

名古屋市内の学校の取組が入っていない。県内で一番人口の多い名古屋市の取組が一つぐらいは入っていた方がいいと思う。

(事務局)

第1回の協議会で、アンケート調査の実施に関する資料を出しているが、調査対象として、学校は国立や名古屋市立を除いている。

(伊藤委員)

管轄外ということであれば、それで理解する。

(大鹿会長代理)

今回、調査の回答率がとても低い。自分もアンケートを書いた記憶があるが、今日資料を見て、自分の大学はもっとやっているはずなのに、なぜ書いていないのかと思ったが、多分、環境教育という言葉に縛られている感じがする。

事業者や学校も、環境教育という看板を掲げた活動は多分少ない。SDGsの取組はやっているが環境教育はやっていない、やっていないから書かないというのが、この回答率に表れていると思う。評価とは関係ないが、事業者など、特に回答率の低いところを上げるためには、そこに課題があると思う。次回のアンケート時には御留意いただきたい。

(今井委員)

市町村の調査候補の説明で、その市と連携しているNPOは、社会教育委員が代表を務めており、地域の方と連携し、非常に素晴らしい取組であることを知っていて、良い調査候補だと思う。

小学校PTAの調査候補についても、地域学校協働活動を生涯学習の関係で進めており、学校、地域と家庭が一体となって実施している素晴らしい活動なので、紹介されるといいと思う。

(堀尾委員)

行動計画にあるように、取組の効果的な展開がなされているか、世代に応じた取組の拡充がなされているのか、連携、協働の強化の中で、多様な主体との連携があるのか、世代間の連携があるのか、そのような視点でヒアリングすると理解している。定量的なアンケート調査についても、行動計画で、環境学習の機会の拡充と質の向上と言っているのだから、各主体へのアンケート結果から、向上してきているのか、連携、協働の取組強化がなされているのかということを定量的に評価することで、行動計画の進捗も評価すると思うので、そういった意味では、ヒアリングについては、テーマや地域性を選んで、定性的に評価すればいいと理解している。

(北河委員)

評価軸についての議論が飛んでしまったような気がするのだから、そこだけは押さえて、皆さんで目通ししたほうがよい。

調査対象の候補については、関わっている団体それぞれで捉え方が違うのだから、コメントは差し控えたい。

(篠田委員)

中間評価の結果を発信し、各団体の方に見てもらい、今後の活動に生かしてもらうことにも意味があると思う。今回の調査は一例で、活動を実施中の方が見て、各々の路線を修正したり、新しい取組をしたり、未実施の学校や団体が、これならできる、というような使い方をすることはできると思う。

(松尾委員)

環境教育の研修会をすると、三河からの参加者が多い。幼稚園協会も名古屋は別であるという事情もあり、県内全域で万遍なくというのは難しいと思う。

幼稚園側からすると、またここが選定されたのかという思いもあり、他の園から見てそのように受け取られるともったいないと感じる。他の園の取組も掘り下げれば、ある程度色々な側面が見えてくると思うので、そういった視点でも選定を考えてほしい。

(早川委員)

定性的な評価は、県でヒアリングをして、ワークシートでの育まれる五つの力の成果を県がチェックするというのか。将来的には自己評価できるようになるというのが目標か。

(事務局)

2019年3月に作成した「学びを行動につなぐサポートブック」のワークシートを各主体が自ら活用し、環境活動や環境教育を進めるよう配布、展開しているが、今回、代表事例と取り上げ、ワークシートを作成し、それをまた展開して、取り上げた事例の取組や工夫を少しでも多くの団体に取り入れてもらおうと考えている。

(早川委員)

そうであれば、今回の中間評価でも、まず取組団体に自己評価をしてもらうべきではないか。

(事務局)

各団体の方にそこまでやっていただけるかわからない。調査にはお互い手間がかかると思う。調査先に過度な負担をかけず、作成していきたい。

(千頭会長)

早川委員の指摘は重要で、県の環境活動推進課や当協議会が、各主体の活動の良し悪しを判断するのではないと思っている。

篠田委員の意見のとおり、良い事例をピックアップすることで、それを見た地域や団体、学校が、環境学習等のヒントが得られればよく、そこが他の行政

計画の評価とはだいぶ違うと思う。

なごや環境大学の講座では、必ず講座の受講生に振り返りのアンケートをとり、講座を主催したNPOや講師にも、自分の思いが達成できたかどうかについてアンケートをとる。環境大学自体も評価をするというように、評価の主体が複数である。

この資料に記載された各主体の活動について全部できれば、素晴らしい評価ができるが、そうはなかなかいかない。その出発点が見えたらいいと思う。

(新海委員)

長年、環境教育に関わってきたが、体験のみの環境教育、環境について知識として教えるだけの環境教育がまだ多いように感じる。一人一人が問題解決に向けて行動するためにどのような力を育むことが必要かを、県だけでなく、協議会委員の経験や知恵を出しあって作った計画である。行動に結びつく環境教育に気づいてほしいという思いがあるため、団体には自己評価もしてほしい。今回の評価はもう一步深めて一緒に実践を進めていこうということを示すための評価だと思っている。

協議会や県が、良い悪いと判断する評価ではなく、環境教育の本質を共有しみんなで実践の質を高めるための評価であると理解している。

(千頭会長)

今回資料1で候補を挙げているが、何をやったかということだけをヒアリングするのではなく、この五つの力の観点から見たときにどうだったかという分析をヒアリングの中からうまく引き出せたらいいが、うまく引き出せないような事例だったとしたら、候補2なり、別のところを探すのかなと思う。

大鹿委員が言われた、頑張れていないところをヒアリングするというのは、一つの考え方だが、我々が、ここは頑張れてないと評価をするのは違うと思う。グッドプラクティスを紹介する方がいいと思う。

資料1のヒアリング候補について、各委員の意見を受けて、事務局で再検討するとともに、ヒアリング内容やヒアリング結果のまとめ方についても各委員にメール等で送付していただきたい。

ヒアリングをするにあたり、他にアドバイスがあればお願いしたい。

(大鹿会長代理)

現在、学校がコミュニティスクールを作っており、学校が主体であるが、PTAや地域も関わるので、コミュニティスクールができている学校は、連携がしっかりできている。

(千頭会長)

コミュニティスクールにヒアリングする場合は、学校や地域の方とPTAの

方が集め、ヒアリングができれば、いい方向に進むかもしれない。

(事務局)

事務局で再検討した調査先や、具体的なヒアリング内容について、メール等を送るように御指示いただいたが、第1回協議会を前倒しで開催し、調査先や調査内容について御議論いただいてもよいか。

今回の資料でお示ししたスケジュールでは、取組調査をしてから、第1回の協議会を開催しようと思っていたが、取組事例を調査する前の段階で、開催することも検討しようかと思っている。

(千頭会長)

その方向で、是非検討していただきたい。

次回は、資料2を少しバージョンアップし、このような形で来年度の終わりには評価書ができますという章立てがあれば議論しやすいと考える。

次回は、割と早めに協議会を開いて、どのように評価をしていくのかということをもう一度詰めたい。

(藤岡委員)

この中間評価で、どういうものができ上がるのか、まだ十分にイメージができていないので、また議論させていただきたい。

(3) 閉会